

- 1 教育事業名 「無人島アドベンチャーキャンプ 2013」  
～ みんなとちがう夏、冒険しようぜ ～
- 2 ねらい 家庭、学校、地域では体験できない無人島でのサバイバル生活（電気・水道・ガス、風呂・トイレ、テレビ・ラジオ・携帯電話のない不便さ）を乗り越えることで、たくましさ、やさしさ、仲間との連帯を実感し、自己肯定感を高め積極的に活動するリーダーを養成する事を目的とする。  
さらに、近年重要視されている防災教育の面から、こうした自然体験から災害時に対応する能力を身につける事も併せたプログラムとする。
- 3 期 日 平成 25 年 7 月 28 日（日）～8 月 3 日（土） 6 泊 7 日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 24 名
- 6 参加人数 24 名
- 7 参加者内訳 小学生 13 名、中学生 11 名（男性 13 名、女性 11 名）  
（県内 21 名、兵庫県 1 名、大阪府 1 名、宮城県 1 名）
- 8 カウンセラー 大城敏氏（パトリングがト`漕店代表） 豊見山明久（有限会社豊海代表）  
山下智郁（港川小学校教諭）  
田福めぐみ（石垣青少年の家主任専門職員）  
満名佳吾（糸満青少年の家専門職員）  
宮里大悟（名護青少年の家専門職員）

9 実施プログラム

月日(曜)	朝食	活動内容					宿泊
		午前	昼食	午後	夕食	日没後	
7 月 28 日 (日)		オープニング オリエンテーション	注 弁	ビバーク用テントの作り 方 野外炊事講習会 大型カヌーの基礎	全 体 炊 事	無人島での生活計画 装備品パッキング ふりかえり	キャン プ 場
7 月 29 日 (月)	軽 食	大型カヌーで無人 島へ <班別活動> ビバーク用テント 作り	野 外 炊 事	<班別活動> 釣りや貝の漁労講習会 スノーケリング講習	野 外 炊 事	<班別活動> ボンファイヤー ふりかえり	儀志 布
7 月 30 日(火) 8 月 1 日(木)	野 外 炊 事	<班別活動> 釣りや貝の漁労 班で計画	野 外 炊 事	<班別活動> 釣りや貝の漁労 班で計画	野 外 炊 事	<班別活動> ボンファイヤー ソロキャンプ(4日目)	儀志 布
8 月 2 日(金)	野 外 炊 事	<全体活動> 追い込み漁 炊事準備	野 外 炊 事	<班別活動> 準備パーティー準備 班で計画	全 体 炊 事	<全体活動> 分かち合いの集い	儀志 布
8 月 3 日(土)	軽 食	かたづけ 大型カヌーで移動	レ ス ト ラ ン	ランチパーティ エンディング		泊港にて保護者と一 緒に ふりかえり	

## 9 事業の様子



初めてのソーリング講習



火起こしは苦勞するぜ！



ウミガメとゆったり泳ぐ



大型カヌーで無人島めざせ！



とったどー(^O^)



ペアキャンプもへっちゃら



ウミガメの赤ちゃんに遭遇



共に息合わせ追い込み漁



とった獲物は逃さない



収穫に感謝



仲間とのお別れパーティー

## 10 参加者の声

アンケートの自由欄では、「普段はやらない火興しや野宿など、初めての経験がいっぱいあった。」と皆が冒険家になったような興奮を伝える感想や、「みんなと協力することの大切さを改めて感じました。」「きついときもあったけど、友達がいたから楽しくできた。」「親や水、火、食べ物のありがたさを知ることができた。」「チームワークや家事の大切さがわかった。」など、自分中心の発想だけでなく、他者を思いやる感想が出ており、主催者の意図したねらいがおおむね達成されたものと考えています。

## 11 担当者所見

各班や個人のスキルに差はあったが、自ら獲得した食材を食し、電気も水道もない状況でそれぞれの役割（炊事、水くみ、テント設営、ゴミ集め、連絡などの仕事分担）をこなし、かつ無人島生活を楽しんでいる様子が見られた。今まで慣れ親しんできた便利な生活環境を懐かしみ、早く帰りたいと弱音を漏らしながらも、実際に無人島で生活しているという事実で自信を深め、その一方でアンケートの感想にも「親や水、火、食べ物のありがたさを知ることができた」とあり、他者への「感謝の心」が深まったのではないかと考える。

また、見ず知らずの仲間同士が共同生活する上で「規範意識」は欠かせないものである。初日から寝場所作り（ビバークテント）や簡易トイレ、更衣用テント設営など、心地よく無人島生活を行うためのルール作り（例として、目上の人に対する言葉遣い、時間厳守、簡易トイレの清潔な使用等）を行い、お互い「追い込み漁」や分かち合いの集い（お別れパーティー）等のプログラムをこなしながら、共同企画・作業を通して「規範意識」と共に仲間意識を高めていった。

沖縄本島でもなかなか無い、世界でも透明度が高く魚介類の豊富な慶良間の海で、直接ウミガメに接近したり、ウミガメの子どもが孵化して海に戻る自然の摂理を間近に見る感動の一方、ハングルや漢字の文字が書かれたペットボトルをはじめとする海洋ゴミの漂着も確認し、世界は海で繋がっており、一人一人の努力もさることながら、全人類の課題として自然環境への問題意識を学ぶきっかけとなった。

担当として日々の子供たちの様子（たとえばハプニングにも対応する姿）から、たくましさやチームワーク力を感じ、自己肯定感が徐々にではあるが醸成されていると考え、本事業の目的がほぼ達成されたと感じた。

### （課題）

- ・ 日中の炎天下での活動が続き、カウンセラーとの相談の結果、キャンプ中日に一日から半日オフタイム（休息日）を取り、お昼寝の時間を設定した。全体を通して見ると、その後の活動がスムーズに行えたので、次年度の計画を一部変更し、オフタイム導入も含め長期のキャンプに耐えられるゆとりのある内容にしたい。
- ・ 6泊7日の期間について、スタッフの反省の中で「短くしても良いのでは」「適当」と二つの意見が出た。どちらも教育的効果を考えた意見であり、上記のオフタイム導入も含め、今後の課題としたい。
- ・ 主となる経験豊富で有能なカウンセラーの確保が一番の鍵となる。人材ネットワークの構築も必要かと思われる。